

# 今年六月、東証一部に再上場 消火の最強プロ集団を目指す

## 日本ドライケミカル社長 遠山榮一氏

防災設備や消火器、消防車を手掛ける日本ドライケミカルは今年六月二九日、東証一部に再上場した。一九五五年に設立された同社は一九九一年に東証一部に上場し、一九九五年には東証一部に指定替えとなっていたが、二〇〇〇年に米国の防災関連複合企業、タイコ・インターナショナルに買収され、上場を廃止していたもので、一〇年半ぶりの再上場となった。三菱商事の商社マンとして活躍した手腕を買われ、二〇〇四年に入社、二〇〇八年から社長として同社の舵を取る遠山榮一氏に再上場の経緯や今後の事業展開などを聞いた。

### 一九五五年に粉末消火器メーカーとして設立

—— 今年八月に東証一部に再上場し、初値も二二二円と公募価格(二〇四〇円)を約九%上回りましたね。

遠山 一九五五年に粉末消火器メーカーとして設立された当社は一九五七年に原材料の供給を受けていた旭硝子と資本提携、同社の子会社となつて消火設備を開発、化学プラント関連企業などを主な顧客に成長し、一九九一年から東京証券取引所に上場していましたが、二〇〇〇年九月にアジア展開の拡大を目指していたタイコ・インターナショナルの傘下

に入ったため、同年十二月に上場を廃止しました。しかし、タイコは思うような事業展開ができなかったことから日本から撤退、二〇〇八年二月にタイコが保有していた株式を大和証券SMBBCプリンシパル・インベストメンツが引き受けたのです。

同社が当社株式を取得した時から再上場を目指していたこともあり、外資系企業から日本企業に戻つて三年ほどで東証一部に上場することができました。上場により取引先の信頼が増すとともに社員の帰属意識が高まっており、今後は総合防災企業としての専門性に一層磨きをかけ、東証一部上場を目指していきます。なお、株式上場により調達した約一億

五〇〇〇万円を千葉工場(千葉県山武市)の設備投資を行っています。

### 業界初のアルミ製粉末消火器を開発

—— 「消火・防災のプロフェッショナルとして、人々に安心と安全を提供する」を企業理念に、防災設備、メンテナンス、商品、車輛の事業を展開していますね。

遠山 現在、当社の主体は商業ビルなどの一般建築物やプラント、船舶の防災設備の設計・施工を行う防災設備事業、消防法に基づく各種消火・防災設備の保守点検業務やそこから派生する修繕などのメンテナンス事業、各種消火器の製造・販売や防災関連商品販売の商品事業、各種消防自動車の製造、販売を行う車輛事業の四事業で、劇場やホテルなどに設置される小型消火器から石油関連施設等向け大型消火器、家庭用簡易消火具など消火器類を中心にはほとんどすべての防災関連用品を取り扱っています。とくに船舶防災設備の分野では三〇年以上にわたる実績があり、大型タンカーや貨物船、コンテナ船、フェリー、消防艇などに独自の船舶防災システムを提案してい



## 連結売上高二五〇億 円の達成を目指す

—— 三年以内に連結売上高二五〇億円の達成を目指しています。

ます。また、丸ビル、新丸ビルなどの高層ビルやインテリジェントビル、美術館などに最新の防消火設備とメンテナンスを提供しています。このほか、業界初のリサイクル可能なアルミニウム製容器を使用した粉末消火器「PANアルミシリーズ」も環境にやさしいうえ、軽く、錆びない、安全な消火器として注目を集めています。

遠山 二〇一一年三月期の当社連結業績は売上高が二二億四八九三万円、経常利益が七億二九二二万円、純利益が二億四三〇六万円でした。これを二〇一四年三月期までに二五〇億円に拡大する計画です。現状の当社事業は「B to B」（企業間取引）中心になっていますが、今後は一般家庭向けの消火器や防災用品の販売など「B to C」（消費者向け取引）も展開、顧客層の裾野を広げていきます。また、かつての親会社である世界的な防災メーカー、タイコとは資本関係は解消していますが、事業面では協力関係にあります。

同社の世界的な販売網を活用し、海外市場を開拓するとともに海外製品の導入も行い、売上げの伸張を図ります。

—— 東日本震災で企業や個人の防災意識が高まっていますね。

遠山 東日本震災を契機に防災意識が高まっていることは間違いありません。突然襲ってくる地震や火事など不測の事態に備える必要性がさまざまな分野で高まっています。当社は防災の中でもとくに火を消すことをすべて行っています。いかに効率的に火を消すか、いかに確実に火を消すか、を追求し、火を消すこ

との最強プロ集団を目指しています。なかでもプラント防災設備では電気、ガス、石油、化学、原子力、ゴミ処理設備など広範囲の防火対象物に確実に対応できる防災システムが求められています。当社では水、空気泡、粉末、不活性ガス、二酸化炭素水成膜、放水ヘッド、放水銃などを保有、専門のエンジニアが設計から施工、メンテナンスまで一貫して対応しています。火を消す設備は社会インフラであり、火災からかけがえない人命や貴重な財産を守るため、顧客のあらゆるニーズに添えています。

—— 遠山社長は三菱商事の商社マンだったのですか。

遠山 三菱商事時代に米国の三菱系ファイナンス会社である三菱アプセクタファイナンスに八年間勤務し、若干ですが米国企業経営を体験しました。当社も米国企業の傘下に入ったことで財務の透明性や法令順守の徹底などワールドワイドな外資系企業経営の良さを学びました。この外資系企業経営の良い面と日本式の企業経営の良さを取り入れたハイブリッド（複合）経営により、さらなる高収益体制を構築していきます。

遠山榮一（とおやま・えいいち）氏  
1950年1月埼玉県蕨市生まれ。1972年・慶應大学経済学部卒業。同年・三菱商事入社。1999年・日本A&T入社。2004年・日本ドライケミカル入社、経理・財務本部長。2005年・代表取締役役に就任。2008年・代表取締役社長に就任。